

立教大学池袋図書館の開館に寄せて

図書館長 石川 巧

2012年11月7日、ここに立教大学池袋図書館が開館しました。2010年7月の着工以来、2年あまりにわたる工事期間のあいだに東日本大震災が起こったため、工事の進捗が懸念された時期もありましたが、多くの関係者のみなさま方のご尽力により予定通り開館することができました。

立教大学の歴史は1874年に築地に開校した立教学校に始まりますが、図書館が独立した建物としての機能を有するようになったのは、池袋移転後の1918年に竣工したメーザーライブラリー（旧館）以降です。関東大震災にも耐えたこの建物は、現在も立教大学の象徴的な建築物のひとつとして学生・教職員・校友から広く親しまれています。

その後、丹下健三氏の設計による図書館本館（新館）の開館（1960年）、新座保存書庫開館（1982年）、新座2学部設置にともなう武蔵野新座図書館の開館（1998年）と施設の拡張につとめ、図書館は学習、教育、研究を支える主要機関として発展を遂げてまいりました。また、2000年代からはメディア・ライブラリーの設置、各学系図書館（自然科学系、社会科学系、人文科学系）の開館、武蔵野新座図書館の増改築（新座図書館と改称）を進め、学生と教職員がそれぞれの目的に応じて各館を使い分けることができる機能分散型の図書館を整備しました。

しかし、近年では図書館の役割がより多様化し、グループ学習や自由討論を可能にするオープンスペースの充実、オンライン・ジャーナルをはじめとした電子資料の整備、領域横断的な研究分野のサポート、非来館型サービスの拡充などが求められ、ひとりひとりの利用者の要望に応えていくためには、むしろ、機能の集中による効率化とワンストップサービスが重要であるという認識が共有されるようになりました。

そのようなことから、立教大学は2006年12月に部長会に提案した『総合発展計画 基本計画(案)』に「図書館の充実・整備」を掲げ、2008年1月の部長会で『立教大学総合発展計画 複合棟2および複合棟3建設 基本計画』が承認されて、新しい図書館の計画が具体的に進められることとなりました。

池袋キャンパスの全資料を集めて誕生した池袋図書館は、延床面積約19000㎡、閲覧座席1520席、最大収蔵冊数200万冊を誇り、単館としては国内屈指の規模になります。

学習支援としては、ノートPC600台（常設300台、貸出用300台）を備えるとともに、メディアセンターとの連携によって学生PCヘルプも行っています。情報リテラシーの支援として複数のラーニング・アドバイザーを常駐させ、文献資料の調べ方はもとより、レポートの書き方、研究構想のまとめ方などをきめ細かく指導できる体制を整えています。新座図書館2階に2012年4月に開設された「しおり（新座図書館 ラーニングcommons）」とともに、利用者の学習・研究に活用されています。さらに、池袋図書館は長時間滞在を可能にするために、テラス、リフレッシュルームを設置するとともに、飲み物の摂取、モバイル機器のコンセント利用の規制を緩和しました。

モダンとクラシックの融合というコンセプトのもと、建物は落ち着いた風格を備えつつ、周囲を見わたすことのできる広々とした開放感も実現しています。通常の閲覧椅子の他、さまざまな形状のソファ、PCを使いながら資料を広げられるように設計された奥行きのある閲覧机など、あらゆる観点から利用者のストレスを軽減するための措置を施しています。バリアフリー対策、節電対策はもちろん、図書館スタッフが常に利用状況の把握と柔軟な対応につとめています。

図書館のゲート付近に掲げられた「ΓΝΩΘΙ ΣΕΑΥΤΟΝ（汝 自身を知れ）」という碑銘には、自らの無知を自覚しつつ、なおその魂を高めていく〈知〉の営みを実現する場であって欲しいという願いが込められています。一歩足を踏み入れた瞬間から学問探究への意欲がかきたてられ、本気で勉強したくなるような空間。それが私たちの求めてきたものです。池袋図書館が、人と情報の交錯点としていつまでもみなさんから愛される空間であり続けることを願ってやみません。

